

活用力を高める授業の実際

— 対話の要約を通じた、「活用力」の育成 —

千菊 基司

広島大学附属福山中・高等学校 教諭

1. はじめに

今回の学習指導要領改訂により、授業時間数が増加したにもかかわらず指導内容が増加されなかったことから、言語材料についての知識・理解を深める言語活動から、知識を活用する指導を充実させることが英語教師に求められている。言語活動の4つの領域でそれぞれ新たに指導事項が加えられた。これまで以上に、複数の技能を統合した活動の展開や、使いながら知識の定着を図るという姿勢で、言語活動を授業展開に組み込むことが求められている。

2. 活動の設定と、指導手順の考え方

「書くこと」における新たな指導事項に「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと」が加えられた。内容的にまとまりのある「文章」を書く力が不十分だという課題に対応してのことである（『中学校学習指導要領解説 外国語編』 p.19）。この課題の達成のためのサブスキルを高めるために、「聞き取った対話の要約活動」を設定した。

対話の内容を聞き取り、英語で要約するには、「まとまりのある英語を聞き、概要や要

点を適切に聞き取ること」が、まずできなければならない。要約するのは、それを誰かに伝えるためであるが、体験した身近なことからを日記に書いたり、口頭で発表するような活動はこれまでも行われてきたことと思われる。まず聞き手や読み手のために対話の発生する設定を簡潔にまとめ、話の展開を数文で記述するのだが、複数の情報から「必要な」情報の取捨選択を行うには、対話全体から考えられるメッセージ（その対話や出来事の記述を通し、作り手の伝えたいこと）を考え、複数の情報間の優先順位を考える基準をつくる必要がある。この場面で思考力が最大限に必要とされることに注目したい。

実際の授業では、例えば、要約文にタイトルをつける活動などがふさわしいであろう。

また、要約文を英語で書かせれば、語句を文法的に正しく使うことはもちろん、接続詞や代名詞などを利用してつながりをもたせたり、内容の重複を削ることも指導する必要がでてくる。このように活動を展開すれば、内容的・文法的に一貫性の強い文章を作り出す力を育てることができる。

さらに、メッセージを英語で書かせることで、表現力を高めることにもなる。このように考え、活動を設定した。

3. 活動の円滑な遂行のための工夫

思考力・表現力を高める活動は、なかなか生徒にとっては難しい活動のようである。したがって、段階をおって「活用力」の要求レベルをあげたり、マネジメントを工夫し、生徒の活動を活性化し、動機付けを保つために、以下のような工夫をする必要がある。

(1) 解答作成の使用言語

「解答」の作成のための使用言語を日本語にすれば、「聞くこと」の活動になる。英語にすれば、「書くこと」の活動になる。どちらであっても、できごとの記述に加え、登場人物の気持ちをとらえ、英語で表現することも含めて活動させたい。最初は「聞くこと」の活動から入り、要約のコツを理解させてから、英語での要約に入ると生徒の負担も少なく済み、動機付けを保つことができるであろう。

英語で記述する場合、時制のコントロールは、生徒の学習の進み具合に応じて行う。例えば、過去形の習熟のために行いたいのであれば、過去時制で書き、自分の体験談を話すための原稿の作成につなげることができる。関係詞節を利用して記述させたいのであれば、未習の過去完了の使用を避けさせるために、現在時制で記述させ、映画や劇のあらすじを説明する活動にするとよいであろう。

(2) 対話の題材

外国語で「書くこと」は、認知的負荷が高く、動機付けを損なう可能性も高い。そこで、該当学年が1年前に使用した教材を使うことを勧める。1年前の教材であれば、基本的な内容語の習熟は他の活動などで達成されてい

ると考えられるので、聞き取ったことを基にし、要約文の作成に集中できる。また、聞き取ったことを基にすることで、生徒自身が実際に体験したことを発表したもの（つまり内容的にバラバラなこと）をまとめる場合よりも、語彙や情報を統一できることから、内容の一貫性の作り出し方、中でも、情報の優先順位を考え方などに注意を向けて指導ができる。

(3) 年間の授業計画の中での位置づけ

自分で体験したことや考えたこと・感じたことを英語で表現するのが最終的な目標である。従って、この活動は、一定期間、授業の冒頭の時間を利用して実施するなど、「帯活動」として行うことがふさわしい。例えば、1ヶ月続けるとすれば、第1週は日本語でまとめることにし、第2週は英語の空欄補充にし、第3週は、書き出しやヒントを与えて完成させる形式にし、第4週で自力で完成させるように展開するのはどうだろうか。

時期的には、例えば10月に始めると、2学期の終わりごろに、前年度の教科書の対話文がすべて要約されることになる。要約を通じ、昨年度に得た知識を活性化させ、さらに新しいスキルを磨くことができる。そのようなプロセスを経て、「できる」と感じられたら、活動は活性化していく。

(4) グループ学習

ペア学習・グループ学習の形態を取り入れるのに、この活動はふさわしい。まず、対話の長さにもよるが、一人の生徒が全部聞き取れるわけではないので、同じ題材を要約させるとはいえ、実際に生徒に活動させると様々

な解答が出てくるものである。インフォメーション・ギャップがあれば、必然的に、生徒は積極的に情報交換する。

また、生徒が自信を持って使うことのできる表現は同一ではないため、パラフレーズの方法が多様であることを、実体験を持って学ぶことができる。

さらに、対話の「メッセージ」のとらえ方が異なれば、情報の優先順位に違いが生まれるので、さらに、生徒の持ち寄る解答に多様性が生まれる。英作文で使用できるアクティブボキャブラリーのギャップから生じる違いを越えた違いが生まれるのである。

3つの異なる理由によりインフォメーション・ギャップが生まれる。解答の作成のために、積極的に活動しなければならないという前提が生まれる。答が1つでないのだから、発言はしやすくなる。さらに、誰が発表するかを含めた役割分担、制限時間、評価への反映などをはじめ、グループ学習を構造化し、マネジメントを工夫すれば、生徒の活発な参加を促すことができる。

(5) ことわざ・格言の学習との関連

ことわざの表現は、非常に簡潔にまとまっておき、対話全体から考えられるメッセージのまとめを果たすことができるものが多い。また、日英のことわざの対比を通じ、日本語のことわざにあたる表現が、英語ではまったく異なる比喻を用いられていることや、類似表現があったりすることを知るとは、文化についての理解を深めることはもちろん、言語や文化に対する関心を高めることにつながる。要約活動が始まるまでに、ことわざの知識習得をなんらかの形で指導計画の中で取り

入れておけば、メッセージと結びつけて活用できるようになると期待できる。

4. 活動展開の実際

対話文の要約活動を、帯活動として1ヶ月間継続していく場合のモデルを記述する。

(1) 第1段階（4回程度）

①指導観：

この段階では、生徒一人一人の思考力を高めることが大切である。グループサイズを小さくし、グループ内での責任をきちんと理解させたいので活動へ参加させることが大切。

②要約作成のための使用言語： 日本語

③グループの構成員： 3名程度

④評価の観点： 「コミュニケーションへの 関心・意欲・態度」 「聞くこと(まとめのテスト)」

⑤評価方法： 授業観察・ワークシート・ 小テスト(まとめ)

⑥指導手順〔15分程度〕

- A. 語彙の活性化：1年前の教材だが、その時以来、あまり教材の中に見られなかった語句に注目させ、あらかじめそれらの日本語訳を考えさせる。意味を覚えている生徒に挙手させて発表させると、スピーディーに活動が展開できる。
- B. メモを取りながら聞き取り（3回）の後、各自で答案作成
- C. グループディスカッション：毎回の授業で、グループ代表として発表する生徒を変えるよう指示する。発表する生徒が困らないように、みんなで知恵を出し合うように促すとよい。慣れてくると、この段階の作業が3分程度で済むようになる。

D. 代表の発表による要約答案の作成：各グループの代表を起立させ、発表すれば座れるようにマネジメントすると、発言が活発になる。どこかのグループが発表した後でも、異なる意見、付け加えたい情報などを積極的に採り上げ、生徒の積極的な参加を促したい。

⑦指導の工夫：

題材次第ではあるが、メッセージの把握は、生徒にとっては表現の難しいところであるようだ。グループの作業に加えても、何もアイデアがないところからは、どこにも進まない。最初は、クラス全体でディスカッションできれば十分なので、発表者が数名であっても、クラス全体で意見を直接聞き、情報を共有して、思考や表現を深めていけばよい。グループで相談したアイデアを発表させるまでには、慣れが必要な場合もある。

(2) 第2段階（4回程度）

①指導観：

この段階も、第1段階と同様に、生徒一人一人の思考力を高めることが大切である。グループサイズや、グループ内での役割をきちんと理解させることが、同様に重要である。

②要約作成のための使用言語： 英語（空欄補充）

③～⑥：第1段階に同じ

⑦指導の工夫：

この段階の要約は、空欄補充の形式で行うため、負荷が小さい。メッセージの表現に習熟するよう、グループで話し合わせるのもよいであろう。英語での表現が難しいようなら、まだ日本語でよいが、3(5)で述べたように、これまでに学んだことわざのリストなどを利

用し、そのまま、あるいは少し変えて利用させるなどすると、活動が活性化するであろう。

また、ここで中間考査が入るようにスケジュールを組み、定期考査で「聞くこと」の評価問題を実施すると、この活動でついた「思考力」を確認することができる。

(3) 第3段階（4回程度）

①指導観：

この段階からは、生徒一人一人の表現力を高めることが特に大切である。解答用紙の自由度を大きくし、多様な「解答」を素に、グループ活動を行わせる。また、グループ活動では、情報の優先順位に目を向けるよう指導することが大切であろう。最後(⑥D)のクラスでの解答作成では、グループの意見を尊重し、たとえ不適切なものであっても、その理由を考えさせる発問をすることで、思考力も高めることができる。

②要約作成のための使用言語： 英語（英文完成）

書き出しを解答欄に与えたり、解答作成に必要な語彙を指定するなど、生徒の負担を小さくすることで、活動への参加の動機付けが高まると考えられる。

③～⑥：第1・2段階に同じ

⑦指導の工夫：

「この情報は要らないのでは」とか「この情報は要るのでは」という発言が聞こえてくれば、グループ活動での思考の対象が情報の優先順位になりつつあると判断してよい。仮にグループ全員の対話の内容をまとめる観点と同じであっても、英語表現は多様なものになるものである。ワークシートを確認し、生徒の活動がどのレベルで行われているかを評

働し、指導に役立てたい。

(4) 第4段階 (4回程度)

①指導観：第3段階に同じ

②要約作成のための使用言語：英語 (英文による出来事のあらすじ完成)

③～⑥：第1～3段階に同じ

⑦指導の工夫：

前段階からこの段階への移行の可否は、生徒の英語力に大きく影響される。罫線だけの解答用紙上で要約ができればよいが、負担が大きすぎるようであれば、第3段階レベルの演習を増やす必要がある。柔軟に対応する必要があるだろう。

5. 活動事例

(1) 問題サンプル

・第2段階 ※Columbus 21 English Course 2

Unit 3 Welcome Home

A. 語彙 purpose: sightseeing:

B. 対話文 (税関での会話)

Woman: Can I see your passport, please?

Hiro: Sure. Here you are.

Woman: What's the purpose of your trip?

Hiro: Sightseeing.

Woman: How long are you going to stay?

Hiro: About three weeks.

Woman: Who are you going to stay with?

Hiro: My father. He lives in downtown Los Angeles.

Woman: OK. Here you are. Enjoy your stay.

Hiro: Thank you.

C. 解答例

Jenny, Hiro and Sanae are at LA (airport) .

They will (stay) in LA for (three) weeks to (enjoy) sightseeing. Hiro and Sanae will

stay with their (father) .

・第3段階 ※『基礎英語2 (2010年度)』を用いた事例

Lesson 77 The Farmer's Festival

A. 語彙 incredible: antique:

B. 対話文

Tomo: Look at this place! The animals! The plants! The food! It's incredible!

Sarah: Would you like some cotton candy, Sally?

Sally: Oh, yes! Tomo, where's Ryota?

Tomo: He's at the food stand over there.

Ryota: This food looks like a big rice cracker. What is it?

Sally: It's fried dough. It's really delicious with tomato sauce and cheese. Try one.

Ryota: It's like pizza! Delicious!

Sally: Look over there! There is a parade of antique tractors.

Tomo: Wow! Look at that! What's in the next stand?

C. 解答例 ※ () 内や☆以下は、あらかじめ解答用紙に印刷。

設定: (The Rogers and Tomo and Ryota are) at the farmer's festival.

☆どこにいますか。

展開: (Tomo are) excited about everything around her.

☆Tomo の気持ちは。

(Tomo) eats cotton candy.

☆Tomo とRyota は何をしていますか。

(Ryota) eats fried dough. It tastes like pizza.

(There is) a parade of antique tractors.
 メッセージ： Festivals excite people.

(2) 生徒によるこの活動の評価

中学校3年生2学期の約3ヶ月間、途中に定期考査や教育実習生の授業を挟んだ時期もあったが、対話文の要約活動を続けた。最後にアンケートをとったところ、ほとんどの生徒が、グループ活動を好意的にとらえていることがわかった。115名の回答(一人2つ回答)のうち、グループ活動は好きだと答えた生徒が103名。その理由として、「教えてもらえるから楽だ」という、自分本位な回答は21名で、「とりあえず恥ずかしいので何か書く」という、否定的な態度も11名であった。「お互いに教え合うことができるのがよい(81名)」とか、「いろんな意見を知って刺激になる(53名)」という、積極的な意見が目立った。「人に説明したり、まとめるために深く思考する(45名)」生徒はまだまだ多数派とは言えなかったが、段階を追って指導していくべきこととして捉えておきたい。

同じ生徒に、グループ活動のデメリットを2つまで選ばせると、回答は151で、何も選択しなかった生徒が15名いたことから、デメリットがあまりないと感じていることがわかる。「わからないものは、生徒間で話してもわからない(67名)」という、解決が困難な問題もあるが、これは、グループ活動の後のクラスでの答え合わせにおいて、ディスカッションを教師がリードして見本を見せることで、最終的に解決するしかないと考えられる。

また、グループ活動の時間が長くなりすぎないように留意することも必要であろう。「自信がないので、発言しにくい」と感じて

いる生徒が約半数60名いたが、実際に観察していると、黙っている生徒はそう目立つわけではなかったのも、生徒の心理面での課題ではあるが授業運営上の問題ではなかった。

やはり、自信を持って発言できるようになるには、そのための英語力が必要なわけで、それを助ける教師の役割を再確認しておきたい。

6. おわりに

思考力・表現力を高める活動を、英語授業の随所に含めて展開をすることで「活用力」を高めることができると思われる。それらにつながる活動は、様々なものが考えられるが、肝心なのは、①生徒ができると思えるような題材にすること、②生徒のやる気を支える手だてがあること、③活動を継続し、生徒が成長を実感できる展開が可能なことであろう。そのような授業の組み立てや展開が非常に重要と思われる。

英語の授業ではよく見られることであるが、グループ活動などの学習形態は、常に授業で活用し、生徒が慣れておくように授業を展開しておく必要があるし、それらがあって、初めてこの活動が可能になる。もちろん、この活動を通じて、それらに挑戦させるのも、活動の性質から考えて、無理なことではない。

そのような学習形態の問題もあわせ、生徒につけたい力をイメージし、目の前の生徒の実態を観察・分析し、授業計画を考え、辛抱強く取り組む必要がある。